

# 人生を拓く

56

湯浅誠 治さん(84)  
北町3丁目

父誠一さん(68歳で逝去)、母静枝さん(82歳同)の5人兄弟の3番目の二男として美瑛村二股(現美瑛町)で生まれ育ちました。

26歳の時、友人の紹介で2歳年下の亮子さんと結婚(平成16年、68歳で没)。1男1女を育て2人の孫に恵まれました。亮子さん亡き後は、趣味の写真に勤しんでいます。

小学校教員だった父親の転勤で、高校までに5回の引っ越しをし、渡島管内七飯町の大沼中学校で新制中学制度第1期生として3年間学びました。

「小学校では、大沼学園(現在の児童自立支援施設)に海洋少年団のボートが2艘あって、生徒に漕いでもらって学校に通った。冬になると小沼に氷が張るので、安全なところに杭を立てて歩いて通っていたなあ」。

岩手大学農学部林学科卒業後、専門知識を請われて、当時の松岡木材(旭川)に研究職として入社しました。「入ってみると仕事は工場管理。大学を出ているから英語が出来るだろうと、次に貿易の仕事に任されてさあ」。

アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ベルギーに合板を輸出していました。小樽



出張所に勤務し、貿易書類を作成して銀行交渉、国内の大手商船各社との交渉に奔走の毎日だったそうです。

「林科を出て貿易の仕事やったりつなっていないよ。あんまり好きな仕事ではなかったなあ」。

旭川工場長を経て旧二瓶木材(当麻町)に転職。留萌工場勤務後、東川の旧ヤマグチ工芸、旧マルミツ木工で工場管理を任せられました。

1980(昭和55)年、46歳で現在地にマイホームを建て、60歳で初の海外赴任。中国・深圳(シンセン)で家具の製造技術指導へ。さらにインドネシア・メダン工場を新設すると、技術指導、工場管理指導に駆け回りました。中国、インドネシア工場の立ち上げと工場管理に奔走の毎日だったようです。

「プライベートな時間なんてなかった。日本食が恋しくて、香港に行ったら必ず日系のデパートに行ったなあ」。

65歳の勇退まで仕事一筋でした。引退後ようやく訪れた平穏な日々。しかし、65歳ごろから体調を崩した亮子さんの介護に追われ、夫婦でゆっくりできた日々はわずかだったようです。

## 俳句

手袋を買いに来そうだ雪明かり  
若水や我れの長命親に謝す  
夢膨らむ大きくなあれと餅をつく  
牡蠣飯に牡蠣の酢のもの牡蠣フライ  
平成に名残惜しむやお元日  
玄関に飾る橙父の家  
雪の夜や太郎も次郎も眠れたか  
もみの木昨日に続きけふは綿雪  
娘から母へ見つめる眼冬すみれ  
ひと山十円母の着物と冬薔薇  
ああ師走気持ち小走り指を折る  
見上ぐ空鈴の音のごとオリオン座  
今宵妻七福神の中に居り  
一月一日エプロンも真新し  
面影がグラスに揺れる聖夜祭  
平成や良きも悪しきも初昔

保科なほ  
杉山りつ  
こばやし 星来  
横田則子  
高瀬潤  
三島智  
若田郁  
佐々木りえ  
本田咲  
斎藤夕桜  
山内みゆ  
八田昌代  
由川真人  
小林ろば  
石澤清宏  
杉山ひろのり

